

歴史と私 ～北京をめぐる奇縁と機縁～

青山治世

1976年9月9日、現代中国に多大な影響を与えた毛沢東が北京でこの世を去った。私はその1か月半ほど前の7月25日に岐阜県大垣市というところで生まれた。4年前に北京を訪れて日中国交正常化を成し遂げた田中角栄がロッキード事件によって逮捕されたのは、2日後の7月27日のことである。のちに私は以下で述べるようないきさつで、中国に関係する人たちに自己紹介をする時には「北京は第二の故郷です」とよく言うようになるが、研究はもちろん色々な場面で北京との奇縁を感じている。

最近はあまり言わなくなったが、10数年ほど前までは、「八〇後（バーリンホウ）」とよばれる1980年以降に生まれた中国人と初対面で話をする時に、私はよく「毛主席と1か月半同じ時代を生きた」と言って話を始めていた。毛沢東は海外への留学経験はないが、毛に次ぐナンバー2の位置にあった周恩来が20歳前後に日本に留学していたことはよく知られている。国交正常化に際して田中角栄と固い握手を交わした周総理は1976年1月に亡くなっており、残念ながら同じ時代を生きていない。

私は中国の近現代史、とくに政治外交史を専門にしている。私が中国に興味をもつようになったきっかけは、物心ついた頃から、満洲事変から日中戦争にかけて召集で中国に3度出征した祖父（1904～1996）からくり返し中国の話、戦争の話を聞いたことだった。日本の隣には中国という大きな国があり、身近な存在である祖父も関わって日本はその中国と戦争していた……。なぜそんなことになってしまったのか、そもそも中国とはどんな国なのか。そんな漠然とした疑問から、中国、そしてその近現代史への関心が深まっていった。

私が中国を初めて訪れたのは1998年、大学4年生の5月だった。行き先は北京。中国東北部の遼寧省出身で、当時在籍していた大学で教養科目の歴史学を教えていた水野明（中国名・李明 1926～2016）先生に連れて行っていただいた（水野先生は初年次ゼミの担任だった）。張作霖・張学良政権の研究などをされていた先生で、国共内戦の末、国民党とともに台湾に渡り、その後日本に留学して日本人女性と結婚、日本国籍をとり、当時すでに70歳を超えられていた。先生とご一緒したおかげで、ちょうどその年に世界遺産に登録された清朝の離宮・頤和園の一角（北東角にある霽清軒）にも泊まることができた。今から考えれば、初めての中国で頤和園に泊まれたというのは、ずいぶん幸運なことだった。



清朝末期に権勢を誇った西太后が愛用した頤和園にて（1998年）
左が筆者、右が水野明先生

その北京によく留学できたのは7年後、2005年8月だった。中国政府奨学金をいただいたの留学

で、それから 2 年半、清史研究所のある中国人民大学に高級進修生として在籍し、近代中国の在外領事の設置過程をテーマにした博士論文の準備を進めた。大学院博士課程を満期退学してからの留学で、もう 29 歳になっていたため、留学先で交流した中国の大学生は、10 歳ほど年下の「改革開放」による高度経済成長の中で育った「八〇後」の若者たちだった（最初の 1 年間は、やはり 10 歳年下の韓国人と留学生寮でルームメイトになった）。日本では博士課程までずっと大垣の実家から学校に通っていたため、実家を離れて長く生活したのは北京が初めてだった。のちに北京を第二の故郷とよぶようになるゆえんである。

北京オリンピックが始まる半年前の 2008 年 2 月に留学を終えて日本に帰国した私は、第一の故郷である岐阜県にある県立高校で地理歴史科の教員（臨時任用）を 2 年間務め、その後、日本学術振興会（学振）の特別研究員（PD）に採用されて、受入先の大学があった東京にやってきた。2012 年からは現在所属している亜細亜大学で勤めることになり、そのまま 15 年近く東京に住んでいる。

留学を終えてからも、学会参加や史料調査などでほぼ毎年北京を訪れていたが、研究対象としても北京との縁ができることになった。学振 PD を終えて亜細亜大学に就職する直前の 2 月末、高校時代の恩師だった金崎邦男先生（「現代社会」を習った地歴科の先生）から突然お電話があり、「私の祖父は戦前に北京で『順天時報』という新聞をやっていたようで、君は中国近代史を研究しているなら、祖父のことを調べてくれないか」と依頼された。『順天時報』とは 1901～30 年に北京で日本人が経営していた中国語新聞で（北京はかつて順天府とよばれた）、先生の祖父は金崎賢（かなさき すぐる 1878～1962）といい、同紙の主筆を務めていたという。

初めはよくある大陸からの「引揚者」の一人かと思っていたが、調べてみると、『順天時報』の最後の主筆（1919～1930）を務めた以外にも、その後は戦前満洲の代表的な日本語新聞だった『満洲日報』（のち『満洲日日新聞』）の主筆や論説委員長も務めるなど、戦前の日中メディア史ではかなり重要な人物だということがわかった。『順天時報』の主筆として北京に渡る前は、日本で『読売新聞』の編集長や主筆も務めたほか、1930 年代から 40 年代前半にかけて日本で発行されていた各種言論誌に中国問題を中心に大量の論説を発表していた言論人でもあった。

金崎賢は日本敗戦後の 1947 年に帰国し、彼の故郷は福井県だったが、弟が住んでいた岐阜県大垣市に居を構え、そのまま同市で 1962 年に没している。長男の明は同市の中学校で美術教師となり（私の父が同じ中学で同氏から美術を習っていたらしいことを、6 年前に父が他界した時に卒業アルバムを見て知った）、孫の邦男は同市の高校を出て立教大学を卒業後、故郷・岐阜の高校教師となり、私は先生から社会科を習うことになるのである。

金崎賢について調べ始めた頃に、同世代で中国近現代史を研究している関智英氏（現在は津田塾大学准教授）に金崎のことを話したところ、「金崎も重要だが、『順天時報』自体ちゃんと研究されていない」と同氏に言われ、まもなく同氏と一緒に「順天時報の会」という勉強会を立ち上げ、今も続けている。会のメンバーの協力を得て、2017 年には『『順天時報』論説・社論目録』（青山・関編、東洋文庫）を編集・出版し、現在は論文集の刊行を準備している（以上、拙稿「日本における中国研究の機縁と奇縁：『順天時報』と金崎賢」『中国研究月報』2016 年 1 月号 <https://spc.jst.go.jp/cad/literatures/12601> も参照）。

2023 年秋に、中国近世・近代史を研究する堀地明氏（北九州市立大学教授）が中心になって北京史研究会が作られた。堀地氏は私よりも前に北京の中国人民大学に高級進修生として留学経験があり、2023 年夏に『清代北京の首都社会：食糧・火災・治安』（九州大学出版会）を出版されていた。日本には満洲や上海、天津などの都市史の研究会はこれまでもあったが、北京史研究会はなかった（かなり以前にあったのかもしれないが、管見の限りは知らない）。かつて北京に留学して第二の故郷とよび、北京にゆかりのある『順天時報』の研究を進めていることもあり、私も参加することにした。

同研究会の第 1 回会合は 2023 年 10 月 28 日に東京大学本郷キャンパスで開かれ、そこで今井貞夫氏に会った。今井氏は戦時中の日本の対中政策、特に「和平工作」にも関わった陸軍少将・今井武夫の子息で、順天時報の会にも発足初期から参加してくださっていた。新型コロナウイルス（COVID-19）の影響で対面ではしばらくお目にかかっておらず、久しぶりの再会だった。しかし翌年 2 月、突然その訃報に接した。

今井氏と親交があり、このほど『中国専門記者の日中関係史：太田宇之助を中心に』（法政大学出版局、2025 年）を出版した島田大輔氏（東洋文庫奨励研究員）のよびかけで、2024 年 5 月に今井氏の墓参をすることになり、私も参加した。墓所は多磨霊園にあり、その時偶然にも『順天時報』の初期の主筆だった一宮房治郎（いちみや ふさじろう 1884～1948）の墓を見つけ、名刺受けに仔細を書いた名刺を入れておいた。その後なかば忘れかけていたが、1 年近く経った今年（2025 年）3 月、孫にあたる一宮彪彦氏（いちみや あやひこ名古屋大学名誉教授）からメールでご連絡をいただき、先日お目にかかることができた。

一宮房治郎は日本の東亜同文会が中国に設置していた東亜同文書院の出身で、卒業後は『朝日新聞』記者を経て、北京の『順天時報』、瀋陽の『盛京時報』の主筆となり、のち衆議院議員、海軍政務次官などを務めたいわゆる「メディア議員」の一人で、終戦後の東亜同文会解散時の代表理事でもあった。一宮に焦点をあてた研究はほとんどなく、『順天時報』や『盛京時報』、東亜同文会との関わりなども含めて、中国近現代史・日中関係史との関わりでも今後調査を進めてみたいと思っている。

2016 年に書いた前掲のコラムの結びで私は、「戦前期に中国大陸と深い関わりを持った日本には、戦後 70 年が過ぎ去った今日でも、単なる個人史にとどまらない、中国や日中関係に関わる重要な歴史研究の種子が無数に残されている」と記した。私の祖父は普通の庶民の一人として召集され兵士として中国に渡り、私も普通の留学生の一人として中国に渡ったが、多くの恩師や研究仲間との出会いもあり、中国近現代史・日中関係史の研究を深めることができたことは幸運であった。こうしたさまざまな奇縁が機縁となって、歴史研究の広がりや深みが生まれていくことを、戦後 80 年の今年、あらためて感じている。

■青山治世／AOYAMA Harutoshi

1976 年、岐阜県大垣市生まれ。1999 年、愛知学院大学文学部歴史学科卒業。2004 年、同大学院文学研究科歴史学専攻博士後期課程満期退学。博士（文学）。2008 年から岐阜県の県立高等学校で 2 年間常勤

講師を務めた後、2010年に日本学術振興会特別研究員（PD）、2012年に亜細亜大学国際関係学部国際関係学科専任講師となり、2016年から准教授。専門は中国近現代史、東アジア国際関係史、日中関係史。主な著作は『近代中国の在外領事とアジア』名古屋大学出版会、2014年、『出使日記の時代：清末の中国と外交』名古屋大学出版会、2014年（共著）、『東アジア諸国と近代世界』〈いまを知る、現代を考える 山川歴史講座〉山川出版社、2025年（共著）。